

沖縄県宜野湾市の米軍普天間飛行場の返還と一対であるかのように、名護市辺野古の海を埋め立て、新基地建設が強行される沖縄。24日の県民投票は、この理不尽な国策を真正面から問うものだった。沖縄戦は知らない。基地は生まれた時から当たり前のようであり続けている。若い世代はこの投票で、どんな選択をしたのだろうか。
(安藤恭子、石井紀代美)

2.24 沖縄県民投票 若者の選択

名護市

「賛成、反対。どちらでもいい。いろんな思いを、投票箱にぶち込みましよう！」。投票日の朝。小雨の名護市街地で合羽姿の地元・名桜大の学生ら四人が、ハンドマイクを握った。投票を呼び掛けるキャラバン車にカラフルな手書きのステッカーが飾られた。

「反対」に投票した名桜大四年の女性(三三)も声を上げた。「生まれた時から基地があつて、相手はどっち側か、友だち同士でも顔色を見て話す。苦しいです。もう基地の話がタブーとされる状況、変えましょう」

英語教師を目指す一年の川崎将吾さん(二七)は、観光で多くの外国人が訪れる沖縄にひかれ、佐賀県から名護に進学した。「過大な米軍基地を、本土が小さな沖縄に押しつけてきたことを、来て初めて知った」と振り返る。川崎さんも「反対」に入れた。辺野古の基地について語ろうと呼び掛

投票所に向かう若い家族連れ=24日、うるま市で
市内各地を車で回り投票への参加を呼び掛ける若者グループ=24日、名護市で

けているのは、「少し前の自分のような無関心な人に、考えてほしいから」。投票に行かない人もいる。メンバーに手を振ってくれる車はまばらだ。スパーに子どもと買い物に来た本部町の女性(三三)は「どっちでもいいから、行かない」。市内の男性(三三)は「転勤で沖縄に來ただけ。

関心がない」と話した。春から大阪の大学に進学予定という宮城拓さん(二二)も「反対」に入れた。おじいから沖縄戦で亡くしたきょうだいの話を聞いてきたから「戦争とつながる基地はなくていい」と思う。

名護市では昨年、政権が推す市長が当選後、有料ごみの値段が安くなり、保育も無料化された。「基地ができた方が経済が潤う」と話す同級生もいる。宮城さんは「開発で辺野古の海を壊してほしくない。きれいに残して、観光に使った方が町は発展できるんじゃないか」と提案する。

うるま市

嘉手納基地に近いうるま市石川の投票所。会社員の新田実佳子さん(二七)は迷わず「反対」に。「政府のやり方は汚い。辺野古への土砂投入もひどい」と話す。うるま市では二〇一六年、米軍属の男にウオーキング中の二十歳の女性が暴行、殺害される事件が起き



うるま市第13投票区投票所

生まれた時から基地

た。その年の暮れ、自宅にいと異なる低空飛行をする米軍ヘリの音が鳴り響いた。「落ちるのか」と不安になったその後、東村高江でヘリが大破、炎上したというニュースを見た。「夜は一人で歩かない。私が事件に巻き込まれても、自宅にヘリが落ちてても、おかしくない」と話す。

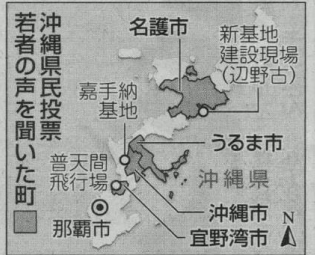
同じく「反対」に入れた金融関係に勤める女性(三三)は「基地に勤める人は困るでしょ…。投票は少し迷った」と話す。投票所から少し先の宮森小学校の出身。同校では六十年前の一九五九年、米軍ジェット機が墜落し、児童十二人を含む十八人が死亡、二百十人が重軽傷を負った。この戦後沖縄最大の事故を語り継ぐため、慰霊祭も毎年営まれる。「政治には無関心。でも今も上空を飛ぶヘリが怖い。宮森小の事故は、基地について考える起点です」

七月月の長女(二七)らと一緒にと一緒に投票所を訪れた宮城良太さん(二七)は「おじい、おばあが子孫の世代に、もう基地を造らせたらあかんと言うから、反対。この町で娘を育てていくから」ときっぱり話した。

政府のやり方汚い／政治に無関心…でも墜落怖い

ちら特報部

普天間の状況移るだけ／県外・国外に持って行って



宜野湾市

市のご真ん中に広大な普天間飛行場を抱える宜野湾市。普段は「バババババ」とごう音を出して米軍機が上空をかすめ飛んでいる。

自動車整備士になるのを夢見て専門学校に通う男性(こは、迷った末に、「どちらでもない」に票を入れた。

自宅は、一七年十二月、児童が体育の授業をしていたグラウンドに、米軍機の窓枠が落ちてきた普天間第二小学校と離れていない。

オスプレイやヘリなどが墜落したり、部品が落ちたりする事故が起きるたび、「怖い」と感じる。でも、投票で迷ったのは、「辺野古に移設しなければ普天間が固定化する」と政府が言うからだ。「普天間飛行場はない方がいいけど、辺野古に移れば、今の自分たちの状況がそのまま移るだけ。それは申し訳ない」

市内には二〇〇四年八

空に米軍ヘリの日常

月、夏休み中の校舎に米軍ヘリが落ちて炎上した沖縄国際大もある。被害を受け黒い焦げ跡を付けた木が今も現場に立っている。

普天間飛行場北側の普天間中学校の投票所を訪れた会社員男性(こは「もちろん反対に〇」という。「基地が必要でも辺野古じゃなくっていい。県外なり国外なりに持って行ってほしい」

東アジア最大の空軍嘉手納基地がある沖縄市。フィリピン人の母とフィリピン人と日本人のクォーターの父を持つ女子大学生(こは、迷いに迷って反対を投じた。

沖縄市・コザ

女性が犠牲になる米兵の事件が起きるたび、自分の身も不安になる。だが、米軍に対する気持ちは複雑だ。生まれて間もなくフィリピンから沖縄にやってきた。小さい頃に通っていたキリスト教の教会には米軍の人が多かった。「みんな優しく接してくれた」。友人の親も基地内で働いている人は少なくない。

だから初めは「賛成に〇を付けよう」と思った。で

雨の降る日も滑走路に駐機する米軍普天間飛行場のオスプレイ=24日、宜野湾市で



も考えを変えた。投票前に上空から米軍機の部品が落ちてきた緑ヶ丘保育園(宜野湾市)の保護者に話を聞き、自分の将来を考え

側(こは)の街、読谷村から訪れた大工見習い中の比嘉航太郎さん(こは)「反対に〇」だ

「小さい子、これから生まれてくる子が大きくなつた時、やっぱり暮らしやすいのが一番だなんて」私服の米兵らでにぎわう繁華街。投票日の前夜、クラブやバーに入っていく人の群れに、沖縄の若者の姿もあった。

自宅は米軍機の飛行ルートから外れているのか、騒音は感じないが、読谷村には嘉手納基地の弾薬庫がある。小学生の時、授業中によく不発弾を処理する「ドーン」という音が聞こえた。そのたびに衝撃で窓ガラスがガタガタと震えた。野球部に所属した高校時代には県内のいろんな地域の生徒と練習試合をした

子の将来考えると「反対」に政府の反応見もの

が、不発弾処理の音が聞こえると珍しいようで「何?何?」と騒いでいた。「同じ沖縄でも、所によって事情は違ふんですよ」

比嘉さんは「辺野古には行ったことがない」。でも、新基地建設には、はっきり反対を示した。

政府は軟弱地盤の存在をずっと隠していた。「米軍よりも、政府の姿勢の方におかしさを感じる。隠すばかりで説明がない。県民の意見も聞かない。本当に不誠実ですよ」。比嘉さんはグラスを飲み干して言葉を継いだ。

「県民投票なんてやっても意味がないかもしれない。でも、県民が反対を選んで、政府にそれを突き付けたとき、政府がどんな対応をするのか見てみたいですね。政治家が何を言い、どうするか見てみたいんです」

デスクメモ

初めて県民投票に臨んだ若者たちの選択は重いものだった。基地の街で選ばずして背負わされた苦悩が一人一人の声にじんじんと響いている。結果は反対が過半数となった。辺野古の新基地は百年も二百年も使えるといわれるとんでもない施設だ。米軍共存に抗う闘いを一日も早く終わらせたい。(直)

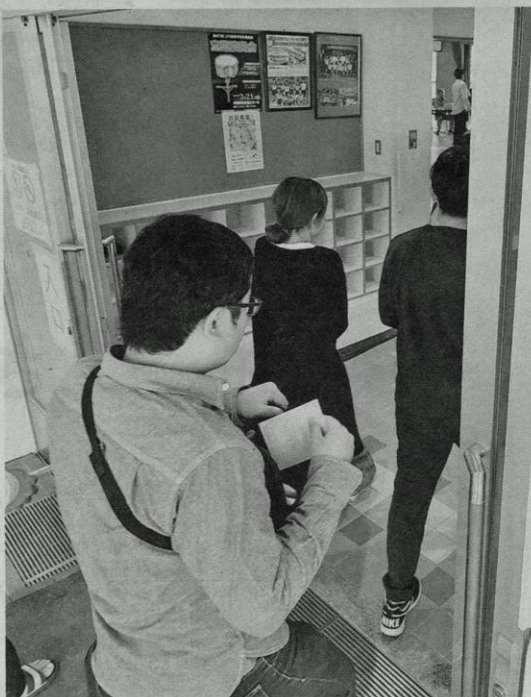
沖縄県民投票

辺野古・宜野湾 住民、決着願い一票

米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の名護市辺野古移設の是非を問う県民投票で、反対が七割を超え、沖縄県民の意思が明確に示された。朝から断続的に雨が降る中で進んだ、二十三年ぶり二度目の意思表明。地元、辺野古と宜野湾の住民らは、基地負担を巡る複雑な思いを一票に込めた。投票を主導してきた青年は、その思いを「重く受け止めて」と政府に求めた。

（神野光伸）＝〇面参照

辺野古米軍基地建設のための
埋立ての賛否を問う県民投票
沖縄市第19



米軍普天間飛行場の名護市辺野古移設を巡る県民投票の投票所

「これ以上振り回さないで」

新基地建設の工事が進む名護市辺野古の米軍キャンプ・シュワブ。そこから約四キロ離れた久志コミュニティセンターの投票所には、辺野古地区の住民らが早朝から足を運んだ。

「一応、反対にしました」。キャンプ・シュワブの近くに住む金子修さん（六十）が投票後に明かした。周りには新基地容認の意見が根強く、投票を棄権した住民も多いという。賛成か反対か。金子さんは最後まで迷い、出した結論には「一応」が付いた。

一九九六年の県民投票では、米兵による少女暴行事件を受けて、基地の整理・縮小と日米地位協定の見直しの賛否が問われた。金子さんは「沖縄の基地は許されない」と迷わなかった。

あれから二十三年。「基地がなければ街の衰退は止められない。一概に基地が悪いとは言いきれなくなっ

た」と複雑な思いを抱く。それでも反対に投じたのは「米軍の爆弾処理に伴う振動で、自宅にひびが入った。新基地ができれば、米

ないとも限らない」という懸念からだ。

辺野古地区の会社員翁長武己さん（六十）は賛成票を投じた。「移設は既に決まったこと。移設反対の首長が選ばれるたびに沖縄の民意と言われるけど、辺野古の民意はないがしろにされて

きた」と批判した。「県民投票で終わりとは思わないが、一日でも早く決着を。これ以上、振り回さないでほしい」

一方、普天間飛行場に隣接する普天間第二小学校。二〇一七年、校庭に米軍ヘリコプターの窓が落ちた。「辺野古に新基地を移しても、危険な基地を沖縄に造ることに変わりはない」。同校近くに住む公務員安富真利江さん（三十）は、初めて

の県民投票で移設反対をした。九六年の県民投票時は十五歳。同年代の少が犠牲となり、安富さん両親も基地問題に怒りを寄せた。今も、国内米軍用施設の約70%が沖縄に中し、低空で飛ぶ米軍機騒音と墜落の不安とも暮らす。「政府に沖縄のが届くかどうか分からなくて、多くの意思を示すことで基地建設に歯止めをかけた」と願っている。

アンダー17の選択 辺野古「反対」最多

沖縄 もう一つの「投票」

沖縄県名護市辺野古の新基地建設について、強い「反対」の民意が示された二十四日の県民投票。この期間中、十七歳以下を対象とした、もう一つの「投票」が行われていた。「投票権がない子どもにだって、意見はある」と、那覇市のフリースクールに通う小中高生の子どもたちが主催した。沖縄の「アンダー17」の米軍基地への思いとは――。

(安藤恭子)

県民投票前日の二十二日午後。米国風の店や観覧車、ショッピングモールが立ち並ぶ、北谷町の「アメリカンビレッジ」。沖縄本島中部の西海岸に面した一帯は、かつて米軍の「ハンビー飛行場」があった。一九八一年の返還後に再開発が行われ、若者や米軍関係者が集まる、沖縄有数の人気スポットに変わった。

「投票いかがですかー」。那覇市のフリースクール「珊瑚舎スコーレ」の子どもたち十数人がボードを手に、辺野古の基地建設についての意見を聞く、シール投票への参加を呼び掛けている。実際の県民投票にならって「賛成」「反対」「どちらでもない」の三つから選ぶ。洋服を買いに来たという読谷高二年の照屋慧さん(もと)、花城伶武さ

フリースクール生徒ら主催



県民投票の前日、シールを使い辺野古新基地建設への意見を募る子どもたち。23日午後、沖縄県北谷町で

ん(もと)が、パネルの前に立ち止まった。

照屋さんはちょっと考え「どちらでもない」にシールを貼った。「沖縄国際大に米軍ヘリが落ちた二〇〇四年の事故とか、米軍基地関係の大きな事件事故は大体知っている。住んでいて怖いと思う」としつつ、「辺野古に基地を移し海上を飛んでもらえれば、今の普天間飛行場よりは危険が減るかもしれないから」と話した。

一方、友人の花城さんは「反対」に貼った。「県はずっとノーと言っているのに、辺野古の土砂投入も始まった。沖縄の声を、全く政府に聞いてもらえないのは、少し腹立たしい」と口をとがらせた。

修行中の本土のお寺からたまたま帰省していた北谷町の石渡匠馬さん(もと)もボードをのぞきこんだ。「本土にいと、沖縄の基地のことが分らないから……」「どちらでもない」を選択。部活帰りの同町の中学二年稲嶺盛光さん(もと)は、「親が賛成と言っているから自分も。生まれた時からずっと、ここに基地はあるし」と「賛成」に貼った。

沖縄市の会社員新崎美幸さん(もと)は「一六年、うるま市でウォーキング中の二十歳の女性が米軍属の男に暴行、殺害された事件がショックだったという」。

「基地には『反対』の思いつかないけれど、現状何も変わらないあきらめがある」とため息。投票本番に行くか迷っていたというが

「住んで怖い」「戦争招く」若者も思いさまざま

「子どもたちの活動に励まされた」と笑顔で去った。シール投票は二月に計四回行われ、全部で三百二十七人が参加。このうち十七歳以下は百六十七人で、「反対」が百二十九人(77%)と最も多かった。「賛成」と「どちらでもない」が各十九人(11%)だった。終了後のミーティングでは、スコーレの子どもたちが「十七歳以下でもこんなに思っていることがある」「来てくれた人たちの話題の種になって、うれしかった」と感想を言い合った。

高等部二年の上野響生さん(もと)は「辺野古新基地は戦争につながると思うから、自分は今のところ『反対』。でも米軍基地があるから生活できる人もいるというし、とても難しい問題」と頭を悩ませる。「シール投票を通じていろいろな話が聞けて、自分の勉強不足も実感した。十二月の誕生日には僕も選挙権をもつ。それまでに、投票で思いを表現できるように、考え続けていきたい」と話した。